

音声学・音韻論の研究

山田 英二

本分野では、主たる論考・著作が国内外で 123 篇(冊)見出された。

このうち国内の紀要や学会誌における論文は 60 篇で、前回より 21 篇増となった。今期(2018.4-2019.3)も、全国 1600 冊以上の文系関係紀要・学会誌を渉猟しつつ、ネットで各地の機関リポジトリにもアクセスした。

2018 年 4 月 2 日、MIT のモリス・ハレ名誉教授が亡くなった。94 歳であった。ハレ氏はノーム・チョムスキー名誉教授とともに生成文法研究を発展させてきた。二人による記念碑的著作 *The Sound Pattern of English* (1968) は今もその輝きを失ってはいない。8 年前、MIT 言語学科創立 50 周年を記念する催しが開かれ、その会場で、特大の写真パネルが二人に進呈された。出会ったころ並んで撮った写真を、出会いから 37 年後(1988 年)のチョムスキー 60 歳の誕生パーティで、ハレが半身大に拡大してプレゼントし、それを二人で掲げる様子を写したものだ。その誕生パーティからさらに 23 年後(2011 年)のこの日、二人は両側からパネルを高々と掲げ、三たび一緒に写真に収まった。三つの時代が入れ子構造となり、ことばの重要な概念の一つである「回帰性」が象徴的に示されている。2013 年にはハレ 90 歳の祝賀会が開かれ、ハレ自身も新たな論考を講演し、斯界を沸かせた。その論考は、今期調査した *Linguistic Inquiry* 第 50 巻第 1 号に巻頭論文として掲載されている。心よりご冥福をお祈りする。

今回は、以下の気鋭 30 篇を紹介する。

1. 菅原真理子、「英語の第 1 強勢の位置判断に及ぼす母語の影響——現在分詞形 / 動名詞形 *-ing* と派生名詞形 *-ion* への強勢付与のアンケート調査から」(同志社大学人文学会『同志社大学英語英文学研究』第 100 号)——母語(L1)の韻律システムが第二言語(L2)の学習に与える影響については様々な研究がなされている。本研究では *dominat-ing* (語幹に現在分詞 / 動名詞接辞 *-ing* を付加)、*dominât-ion* (語幹に名詞化派生接辞 *-ion* を付加) というような英単語 22 対を被験者に提示し、強勢位置を答えさせ、母語の影響を調べたものである。その結果、日本語を母語とする英語学習者は、*-ing* を付加したタイプにおいて、第三音節に強勢を与え、**dominating* というように誤った回答をした比率が 64% にもなり、「第三音節への偏向」が強く認められたという。その原因は、日本語の韻律システムにあるのではないかととして 4 つの仮説を提案している。いずれの仮説をとるかは今後の研究に委ねるとしているが、指摘された事実が興味深く、英語・日本語の強勢配置・ピッチアクセント付与についての概説もよくまとまっている。

2. Hideo KOBAYASHI and Peter M. SKAER, “English Unmarked Reduplicants in Optimality Theory: *Ragtag*, *powwow* and *riff-raff*” (広島大学大学院総合科学研究科『広島大学大学院総合科学研究科紀要, I, 人間科学研究』13巻)——英語において重複表現 *chit-chat*, *dilly-dally*, *riff-raff* などが形成される過程を, OT の枠組みで分析している. *riff-raff* などの重複表現で, */rɪf-rɛf/ や */rɪf-rɒf/ ではなく, /rɪf-ræf/ というような /ɪ/ 対 /æ/ の母音交替が出現する理由は, 「調音コストを最小にする」という制約 (Shaer 2005) と, 「(基底語・重複語の間で) 前舌母音性を維持する」という制約間のランキングで説明できると主張する. 低母音 /æ/ は「調音コスト」が最も低いという見解をもとにした論旨明快な論文である.

3. 横谷輝男, 「日本語由来の英単語における母音字の発音 (CMUdict の場合)」(青山学院大学文学部『紀要』第 60 号)——日本語由来の単語が英語に導入された場合どのように発音されるかは日本語母語話者としては興味深い点である. 本論文は, *CMU Pronouncing Dictionary* (v0.7b) (Carnegie Mellon University) に記載された日本語由来の単語の発音を分析し, 報告している. 日本語の母音をローマ字表記した短母音 a, e, i, o, u はそれぞれ /a, eɪ, i:, ɔɪ, u:/ というように, (a 以外は) 二重母音・長母音として発話される傾向があるらしい. 例えば, *shizuoka* /ʃi:zʷoʊkɑ/, *naruhito* /naru:hi:tou/, *haneda* /hanɛɪda/ という具合に. これが, 外国語からの借用時のアメリカ英語母語話者による一般的傾向なのか否かについては, 今後の研究が必要となる.

4. Masahiko Komatsu, “Comparison of Prosody of American and British English Using a Speech Corpus: A Preliminary Analysis” (日本英語学会, *JELS* 36)——40 種類の英文パラグラフを各言語 (各方言) の母語話者に読み上げさせ記録した MULTTEXT というプロソディック・データベースを用い, アメリカ英語とイギリス英語の差異を考察している. この二つの英語を比較した研究は多いが, プロソディに着目したものは少ない. 予備的研究であるため被験者数は少ないが, 今後発展が期待できる.

5. 野北明嗣, 「一般米語全 13 母音に聴覚的に対応する日本語の母音: 英語の母音は決して難しくない」(外国語教育学会『外国語教育研究』第 21 号)——日本語が 5 母音体系であり, (諸説はあるが) 一般米語のそれが基本的に 13 母音体系だとすると, 英語を学習する際, 日本語母語話者は新たに 8 個もの音韻範疇を脳内に構築しなくてはならず, それゆえ, 英語の発音は難しいと認識することになる. 本研究では, 音声分析ソフト PRAAT を用いて, 日本語の母音音声を組み込んだ英単語を作成し, カナダ英語母語話者に示す聴覚実験の結果, 少なくとも生成においては, 英語の 13 母音は日本語の母音 (カタカナ) で代用できると主張する. 小学生から英語教育が始まった今, 一考に値する論考といえる.

6. Kanako Tomaru and Takayuki Arai, “Evaluation of articulatory similarity using

formant and fundamental frequencies during perceptual assimilation of English schwa by native speakers of Japanese” (日本音響学会, *Acoustical Science and Technology* 40.4)——L2の音はL1の音の範疇に基づいて知覚される(知覚同化モデル)という。本研究は、英語の曖昧母音(schwa)を日本語母語話者が/a/として知覚する理由を音響的側面から考察している。従来は、第一フォルマントと第二フォルマントがこの知覚同化に関係していると言われていたが、この二つだけではなく、第三フォルマントと基本周波数の情報も使い、この二つの調音的類似性を日本語母語話者は判断しているのではないかという。

以下、主要論文名と書誌のみ掲載する。7. June-ko Matsui, “The Impact of Intonation Type, Number of Words, and Segments/Suprasegments on English Listening Accuracy” (明海大学『外国語学部論集』第31集) 8. 藤原保明, 「長母音と二重母音の構成素から見た大母音推移」(聖徳大学大学院言語文化学会『言語文化研究』第17号) 9. Hitomi NAKATA, “Hearing Japanese Words in English Songs — Mondegreen Phenomena by Nonnative Listeners” (成蹊大学『成蹊大学一般研究報告』第50巻) 10. 長井克己, 「日本人英語学習者による単音節語の母音短縮と語彙判断」(日本音声学会『音声研究』第22巻第2号) 11. 江口小夜子・山田玲子, 「日本語母語話者による英語音声の音節とストレス位置知覚に影響を及ぼす諸要因」(日本音声学会『音声研究』第22巻第2号) 12. 飯野厚, 「クラウド型高変動音素訓練が日本人英語学習者の音素知覚と調音および訓練効果の認識に及ぼす影響」(法政大学多摩論集編集委員会『法政大学多摩論集』第35巻) 13. Takahiro Ioroi, “Syllabicity of Consonants in Connected Speech in English” (高知県立大学文化学部『高知県立大学文化論叢』第7号) 14. Huayu LI, “The Classification of Alliterating Finite Verbs in Double Alliterating Verses in Old English Poetry” (慶應義塾大学大学院文学研究科『コロキア』同人, *Colloquia*, 第39号) 15. 木村公彦, 「米ペンシルベニア州における後舌低母音/a, ɔ/の合流: 空白の半世紀の歴史再建を試みる」(日本言語学会『第156回日本言語学会予稿集』) 16. 福田稔, 「小学校英語教育におけるカタカナ英語について」(宮崎公立大学『宮崎公立大学人文学部紀要』第26巻第1号) 17. 松浦浩子・若生深雪, 「多様な英語発音に対する日本人学習者の態度——中・大比較から見えること」(福島大学経済学会『商学論集』第87巻第4号) 18. Kriss LANGE, “Analyzing Difficulties in Aural Word Recognition for Japanese English Learners: Identifying Function Words in Connected Speech” (中国地区英語教育学会『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 48) 19. Kyoko Hayashi, “Phonetic realization of the sequence of ‘and’ and a word beginning with a vowel: Comparison between a speech and a debate by Donald Trump” (了徳寺大学『了徳寺大学研究紀要』第13号) 20. Atsushi Fujimori et al., “The Perception of L2 Information Focus Marking” (札幌大学, *Phonological*

Externalization, Vol. 4) 21. Yoshiharu KUMAGAI, “Light Emission Verbs in English: An Investigation of Sound-Symbolic and Semantic Properties” (愛知県立大学外国語学部『紀要. 言語・文学編』第 51 号) 22. 安藤香織, 「英語発音指導における目標の変遷」(中央大学英米文学会『英語英米文学』第 59 卷) 23. William F. Katz, Sonya Mehta, and Matthew Wood, “Effects of syllable position and vowel context on Japanese /t/: Kinematic and perceptual data” (日本音響学会, *Acoustical Science and Technology* 39.2) 24. 池田周, 「日本語を母語とする小学生の音韻認識——音素操作タスクに見られるモーラ認識の影響」(小学校英語教育学会『小学校英語教育学会誌』18 卷 1 号) 25. HATTORI Takuya, “A Listening Test Experiment on English Intonation and the State of Use of Non-Falling Tones by Native Japanese Speakers” (大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト』2017) 26. 野澤健, 「日本語とアメリカ英語の母語話者による相互の言語の母音の L1 母音カテゴリーにおける分類」(大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト』2017) 27. 大友麻子, 「英語音声への気づきを促すための一試案」(東北学院大学『東北学院大学教育学科論集』第 1 号) 28. YONEZAKI Hirokazu, “Possible Effects of Eye-Closure on Spoken Word Recognition and Listening Comprehension” (中部地区英語教育学会『中部地区英語教育学会紀要』Vol. 47) 29. 高尾幸享, 「英語の名詞 + 名詞複合語における強勢位置の変異と限定的規則性」(東洋学園大学『東洋学園大学紀要』第 26 卷第 1 号) 30. Shigeto Kawahara et al., “Acquisition of the *takete-maluma* effect by Japanese speakers” (慶應義塾大学『言語文化研究所紀要』第 50 号). 残る 30 篇は紙幅の関係上省略. 詳細は下記 HP を参照されたし.

単行本は下記 4 冊が目についた.

1. 川原繁人, 『ビジュアル音声学』2018. 三省堂. 2. 山根繁, 『コミュニケーションのための英語音声学研究』2019. 関西大学出版部. 3. 遊佐典昭(編), 『言語の獲得・進化・変化——心理言語学, 進言言語学, 歴史言語学』2018. 開拓社. 4. 西原哲雄(編), 『言語の構造と分析——統語論, 音声学・音韻論, 形態論』2018. 開拓社.

国外では, *Phonology* (英語を対象とするものは 3 篇. 以下, 英語を対象とする論文数を括弧内に記載), *Phonetica* (4), *Natural Language and Linguistic Theory* (1), *Linguistics* (0), *Linguistic Inquiry* (1), *Lingua* (0), *Language and Speech* (7), *Language* (3), *Journal of Phonetics* (6), *English Language and Linguistics* (3), *Journal of Linguistics* (1) の各誌各号のうち, 英語に関わる音声学・音韻論の論文は計 29 篇, 単行本は 30 冊が上梓されている. 詳細については HP (https://eym.sakura.ne.jp/public_html/en/2020/en2020.html) を参照されたい. (福岡大学教授)